

令和2年度第2回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時：令和2年11月2日（月）13:30～15:30

2 場所：オーテピア 4階ホール

3 出席者：

【委員】加藤委員、齋藤委員、篠森委員、常世田委員（リモート）

【オーテピア高知図書館】山崎高知県立図書館長、森岡高知市立市民図書館長（ほか）

4 議事次第

（1）開会

（2）議事

① オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

② 次期サービス計画の策定について

③ その他

（3）閉会

5 議事

（1）オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について〔資料1～3〕

事務局から説明後、委員との意見交換が行われた。

（2）次期サービス計画策定について〔資料4～7〕

事務局から説明後、委員との意見交換が行われた。

（3）その他〔資料8〕

6 議事録

【委員】

サービス計画の取組状況、アンケート調査、サービス計画の策定方針等について事務局から説明があった。

【委員】

ご説明いただいてまず感じることは、驚くべきほどの多様性だと思う。従来型のただ本を貸しているという図書館に比べると、本日の説明にあったように、とんでもなく多様なサービスと業務にあたっているのだから、冷静に考えても非常に大変なことだと思っている。

重要なポイントは、説明のあった内容が、実は県や市の行政が抱えている行政的課題、地域課題と裏表というか、まさにそれが反映されていることだと思う。経済の活性化、それから高齢化に伴う医療問題、健康問題、それから外国人の問題もそう。さらに言えば、今回のコロナのことでさらに進んだと言われているが、リモートによる勤務者がこれから増え、それによってIターン、Uターンが増えるだろうと思う。これは一方で、地方の自治体が望んでいたことであるが、それが加速されるかもしれない。

皆さんもご存じのように、東京の大手の派遣会社が淡路島に本社そのものを移転するというので非常に話題になっているが、こういうことがこれからどんどん起きてくるだろうと思う。うまくいけば大都市の人口が地方にある程度移動してくる可能性があり、この人たちを地方が取り合いになることが想像できる。そのため、地方に移転する人たちが魅力を感じるような受け皿をつくらなければいけないと思う。そういうことの一つのポイントが図書館であり、これはチャンスであるとも

言えると思う。

ただ、先ほどの説明にもあったように、オーテピア高知図書館の業務は非常に多様で今まで経験のないようなものが含まれていて、そして他の機関との連携もあるなかで、明らかに人手不足ということは否めない。オーテピアの場合は、この計画が始まった時から県市が一体となって二重行政を避けることとしている。今まで県立図書館と市民図書館で重複していたものを整備して一本化することによって新しいサービスや業務に立ち向かう人員を確保するというのも一つ大きなコンセプトだった。その辺がそのコンセプトどおりに動いているかどうかという評価が必要になるのではないかと考えている。

繰返しになるが、県や市が抱えている行政課題を少しでも解決するという課題解決型サービスが大きな目標だった。その中身はレファレンスサービスとレフェラルサービスだろうと思う。ただ、どこの図書館でもレファレンスサービスを進捗させることは難しいことで、アンケート調査でも周知の度合いが低いということもあって、レファレンスサービス・レフェラルサービスの発展はこれからだろうと考えている。

もう一つは、県内の市町村の支援、市町村図書館の支援だと思う。報告内容では、資料の提供はかなりのレベルだが、職員を配置して行う人的支援においては、忙しくて大変だと思うがもう少し力を入れる必要があると思う。これは、図書館同士の援助もあるが、これまであまり意識されてこなかった行政課題に立ち向かうという図書館の大きな機能、そういう新しい機能を発揮するという意味でも人的支援に注力する必要があると思う。

地方自治、地方分権と言われると、図書館に関しても市町村が独自にやればいいではないかという連想をする方も結構いる。私は、市町村が自立するためには、その地域に高度な情報が必要だと思う。それは、当該自治体の図書館だけでは無理なので、一見矛盾するようだが、地方の市町村が自立するために必要な高度な情報は、県全体で、あるいは県立図書館が支援し、図書館ネットワークで解決していく。だから、図書館サービスについて言えば、ネットワークを強化していかなければならず、図書館行政を単独で地方自治でそれぞれが独自にやりなさい、というのは違うと思う。一見矛盾しているようだが、地方自治を実現するためにこそ図書館のネットワークが必要だという整理の仕方が必要ではないかと思う。

課題解決で全般に言えるが、報告にあったレフェラルサービス、つまり他の専門機関との連携について。ビジネス支援推進協議会が主催している情報ナビゲーター交流会を今年はリモートでやっている。専門図書館、専門機関の資料室、そういうところと公共図書館の連携がなければ高度な情報提供はできないので、レフェラルサービスをもっと進捗させていく必要があるのではないかと考えている。

コロナの関係で言えば、非来館型、非接触型サービスについて、6月頃に学生と一緒にアメリカの図書館を主にホームページで調査をした。皆さんもご存じのように、アメリカの図書館は1990年代後半あたりから大量に電子書籍を当たり前のように提供しているので、貸出しについては来館をしなくてもかなりできた。e-レファレンスも電話レファレンスをもう何十年も前から当たり前に行っていた延長線上でチャットやメールのレファレンスも当たり前に行っている、これもレファレンスの窓口がほとんど埋まらない。

それから、図書館に行かなくてもデータベースをリモートで使えるサービスもある。市民が図書館に登録し、利用者であることによって、カードの番号がパスワードになっていたりで、有料のデータベースを無料で来館せずに家で使える。

3大SNSを多様に使って情報提供というのはもうどこでも当たり前で、ホームページの多言語も

グーグルのサービスを使って、日本人がいらないような図書館でも日本語でホームページが読めるようになっていたりする。

このような非来館型サービスの実施によって、アメリカの図書館はコロナで閉館しても、かなり平時に近いサービスを行っているということが読み取れた。また、子ども食堂を図書館でやっているところがあって、図書館を閉めてしまったので、子ども食堂ができなくなってどうしようかという中で、入口でパックにしたご飯を配っているみたいなこともやっている例があった。

コロナのような状況になっても非接触型、非来館型のサービスをどう保障していくかというところが肝要。これは東京の図書館でも会議で言ったが、コンビニを使って貸出しをやらないか、あるいはクロネコを使ってやろうではないか。それから、昔のように配本所を各自治体の集会所のようなところに復活させて、そこを拠点にして本を貸したらいいのではないか。それから、もう防護服を着て直接、宅配してもいいのではないか、というようなことが盛んに話し合われている。

愛知の安城市の中央図書館では24時間、予約本の自動貸出装置が館外に向けて口を開けている。予約本に関しては、貸出しは非接触、職員無用でできるようになっているので、このようなサービスがこれからどんどん進んでいく可能性があると思う。

今回残念だったのは、コロナで本を読もうということで、図書館の出番であったはずなのに、あっという間にバタバタと閉館してしまった。結局、図書館が頑張っている印象を市民に与えることができなかった。私は、やはり終息し落ち着いたあとに、はじめてあのときに図書館頑張っていたね、あるいは、図書館閉めて中で暇だったのではないのと評価される。閉館していても実際は暇ではない、普段できない仕事をしたり行政の他の部署に借り出されたり現場は大変だが、市民から見ただけ閉めて暇をしていたのだろうと見られてしまう。どちらのイメージを市民に与えられるかで、そのあとの予算、人事にも響いてくる。だから、そういうことも考えると、終息したあとにどういう評価をもらえるかということまで考えて戦略的に動く必要があるのではないかという気がした。

非来館型サービスについては、コロナが来る以前から、デジタル系の情報をどう提供するかということでさんざん議論があったが非常に遅れている。アメリカはもちろん、韓国などと比べても遅れており、我が国の図書館の課題だった。普通に取り組みれば大変なところもあるが、ある意味コロナ、パンデミックを利用する。例えば、大学では今まで課題だったことがコロナ禍で一気に進んで、アクティブラーニングが進むことはもう目に見えている。そのように図書館も従来課題だったことを進めていくことが手腕ではないかと思う。

【事務局】

先生がおっしゃるように、このコロナ時代、外からどういうふうに図書館が見られていたかを私どもも意識していた。県の方針などさまざまなことがあったので、約1ヶ月間、休館せざるを得ない状況にはなった。休館中も図書館でできることは何か、動画の作成などいろいろなことを職員が自ら考えるいい機会にはなったし、それをまた次期サービス計画も含めて活用していきたいと思っている。

【委員】

資料1の中で順番にいくと、一つは、資料、情報の提供。これは資料2の中のほうでもたびたび出てくるし、それからアンケートでも本や雑誌の品ぞろえ云々、あるいは新鮮な資料の提供がある。基本的には、これはあって当たり前というか、これができないと図書館は役に立たないと思っ

ている。

今回のコロナの件でも出てきて、なおかつ日本は出来てないと先ほどの話もあったが、電子系のもをこれからますます、急速に充実させていかなければいけない。こういうこと言えば、場合によっては、この資料購入費だけでは足りないということもあり得る。そこはなんとか頑張って予算内で買うということでもいいが、基本的には、資料の充実は大前提である。これからどうするかということ議論するというよりも、議論の前提として資料はあるという状態になってほしいと思う。

レファレンスサービス。2番目のところにブックリストとパスファインダーのことが書いてある。資料2の中で出てきていることでは、行政関係でブックリスト作成の要望が非常に多いということで、なかなか苦勞されているように見受けられる。ただこれは、全体としては、先ほどの話でもあった行政課題の解決というところとも関連してくる。行政が課題解決を目的に図書館と協力してブックリストをつくり提供することは、図書館として大変だが、ある意味非常にありがたい。今の時点で言えば、ブックリストの作成等の作業は担当係長以下ぐらいのところで行っているかもしれないが、そういったものを経験した世代がだんだんとこれから幹部職員にもなっていこう。それから、ブックリストだけに限らないが、ある課と連携して作ったブックリストが非常に役立った、図書館の資料やサービスを利用した課で行政課題の解決がうまくいったという事例が出てきた場合には、それが他の課や他の部にも広がっていくと思う。広がる範囲に広げればよいと思う。図書館のほうから行政の課題解決に協力をしたことによって、少ないエネルギーでこれだけの成果が出てくるという使い方がありますよということ、幹部会議とか知事のいらっしゃるところで具体的な例をあげて、ある意味、自慢してもらえればよい。それがもっと進んで、図書館というのは我々の業務パートナーとして必要なものだというところまでぜひ言ってもらいたいと思う。

それから、レフェラルサービスとも関係があり、これも先ほどの話の中にも若干出てきた。課題解決支援をやっていこうと思うと、いろいろな団体との協力、あるいは先ほどの専門図書館との協力がかなり必要になってくる。

特に、関係団体とのことと言えば、出かけて行って話し合うのもいいが、お互いが相手の団体のやっている催し等に参加する。ものすごく単純だが、相手が実施しているセミナーに参加するだけでもいいと思う。そういった具体的な交流を積極的に進めていくことによって、これも前から言っているが、要は、電話1本で「〇〇さんから電話来たよ」「はいはい」と言って出てきて、では「こうこうこういうことでよろしく申し上げます」「はい分かりました。じゃあ来てもらってください」というように、主要な団体とは関係の構築がほとんどできているというぐらいの状態になってほしい。

それから、司書が個々につながりのある人をたくさん抱えていて、分野ごとに強い司書がいる図書館になってほしい。そのようになっていくことによって課題解決がよりスムーズに、より深いところまでできるので、ぜひ進んでもらいたい。そういう意味で、司書の研修をいわゆる座学だとかだけではなく、関係団体との交流のなかでも進めたいと思う。

アンケートの2ページの機関・団体等のところで、「館は業務に役に立つか」ということで、「そう思う」が86%を占めているという結果は、新鮮な資料があってそれが使えるということだけでも館は業務に役に立つということで挙げていらっしゃると思うが、先ほどとの絡みだと、よりディープなサービスを図書館と一緒にやると、もっともっと役に立つことへの理解を広めていただきたい。だから、「そう思う」が86%という数字に満足するのではなく、その中身がより深いところで我々にもっと役に立つと思っていただきたい。

学校のアンケート結果。業務に必要な情報の入手方法が「自校の学校図書館」というのが93.8%として挙がっている。これはどう理解したらいいんだろうと思った。学校図書館の実態を知っている人間からすれば、課題解決が自校の学校図書館だけでできるということは、どのレベルなのか。これで言うと、図書館で解決できる、入手できる情報を限定的に考えていて、それが手に入るレベルで考えているような気もしないではない。だから、これも数字的なことと言えば、本当に学校図書館で必要なものが手に入っていますかと聞いたとき、手に入っているという答えがどれぐらい返ってくるのかという疑問を持つ。

実際はそうであってほしい。学校図書館で言えば、課題解決に必要な情報が県立とか市立とか充実したコレクションを持っているところから、本、雑誌、あるいはそのネット情報も含めて提供されるから、教員からの質問やこういう情報が必要だと言われたときに、それが素早く満足のできるレベルで手に入ると理解してもらえる体制なり、学校の理解が必要だと思う。

今、学校図書館では基本的に正規の司書はおらず非常勤がほとんど。鳥取の県立学校の場合はほぼ100%、常勤にはなっていると思うが、そこでもまだまだそのレベルまで到達できてないところがある。

図書館の役割の一つとして僕が大事だと思っているのが、情報弱者をつくりたくないということがある。情報弱者をつくらないためには、学校図書館の頃からきちんと自分に必要な情報は自分の手で、要は、図書館の司書に協力してもらってということになる。必要な情報については、自分で得て、それを理解したうえで判断するということまでもっていきたい。そのレベルにもっていくためには、教員や学校全体が図書館とは必要な情報を得られる場所だということを十分に理解してくれたうえで、図書館の利用の仕方なりを教えていただきたい。それから将来自分が生きていく、生活していく、仕事をしていくうえで、必要な情報をきちんと手に入れることが必要だということ学校全体できちんと教えていただきたい。そのためには、非常勤の司書がどんなに頑張っても学校自体の意識はそう簡単には変わるものではないと思う。そういった点では両館長も含め、教育委員会全体として情報リテラシーにおける図書館の重要性の理解をさらに進めていただくことは非常に大事なことだと思う。

先ほどリモートの時代になってくると本社が移転して云々という話でメリットというか、図書館の重要性が増すということを言われていた。情報弱者ではなく、情報強者のほうからすると、情報のないところに行くのは嫌だろう。例えば東京にいれば、近くには国立国会図書館がある。今まで十分に、諸々の図書館サービスが充実していたり研究施設があったりするところから出ていこうとしたときに、何も自分を支えてくれるものがないところにはいきたくないだろうと思う。情報収集の面では、以前に比べたら環境的には弱くなったかもしれないが、オーテピアは頼りになる。オーテピアに行けば、少なくとも自分がほしいものに対してはできる限り提供してくれる、努力もしてくれるし、一定のものを備えていると思ってもらえる図書館でオーテピアはあってほしいと思う。

あえてこのところだけ引っ張り出すのは、今、変革が起こりつつある時代のなかで、さまざまな方法で必要な情報を提供できる武器をオーテピアは持っているはず、あるいは持ちつつある。そういうふう成長しつつある。だから、その部分をぜひ大事にさせていただいて、情報強者も情報弱者も頼りにできるオーテピアの存在がよそに向かって売りになる。県として、都会から来られてもオーテピアがあるので心配する必要はありませんよと言ってもらえるだけの信頼を得るということが必要だろうと思う。

感染症拡大防止等による休館時のサービス提供というところで、これについては前回述べたが、内容的に言うと非常にいい方向にまとめられていて、こういった内容で次回対応できるならよいと

思う。やはり、前回は申し上げたと思うが、コロナの最初のシャットダウンになったときに、なぜ書店は開いていて図書館は不要不急の施設に分類されてしまったのかというのが、未だに腹立たしくてしょうがないところ。コロナ禍でも、なんとか開けていたところもあるし、あるいは開けてないにしても中でこういうことをやっていますということを積極的にアピールしているようなところもある。

今の時点でそれをどう取り返すということではないが、一つ大きな前提として確認しておきたいのは、図書館は不要不急の施設ではないということを県と市の当局が理解しているのだろうか。単純に感染能力がどうもそんなに大したことないみたいだとか、だったら開けてもそんなに文句言う必要ないというぐらいの認識なのか。そうではなくて、やはり図書館は開けておかないといけな、ギリギリのところまで頑張ってもらわないといけなシステムだと理解されているのかを一度きちんと押さえてもらいたいと思う。

不要不急な施設という言い方、本当に言い過ぎかもしれない。でも、そんなに感染拡大していないようなところもひっくるめて、「はい、閉館」と言って、バタバタと九十何%の図書館が閉館してしまったという状況を横から見てみると、いかに行政の図書館に対する認識が緩いのかということを目の当たりにしたような感じがしている。

その点についてはちゃんと理解してもらっていますねということもぜひとも確認しておいてもらいたい。最後までうち頑張りますと言って、県や市のほうで腰砕けしないように。その辺のところも一つ確認しておいていただきたいと思う。

【事務局】

私の説明の中で申し上げたように、県立の機能として学校図書館の支援が位置づけられている。学校図書館の担当司書が学校訪問をしていたが、お相手していただけるのは学校の司書。私も県教委にいたのでよく分かるが、組織として学校の校長、教頭が動かないと学校図書館は変わらないと思っている。

私もできるだけ直接、学校長と話をし、オーテピアとの連携、それは本を貸出しするだけではなく、「ティーンズ部」のことも含めて、いかに学校現場とオーテピアを繋げていくか。そういうことに今、意を用いて取組を進めている。今後またいろいろななかたちで、学校との連携は深めていきたいと考えている。

【事務局】

図書館が行政との業務パートナーとして必要だと認識させるというお話では、今、各課とも連携を進めるなかで、いろいろな事業をさせていただいている。その一つひとつの結果を出していくことがトップの認識に繋がるのではないのかと思っている。

また、今後のリモートの時代というお話では、この図書館のネットワークを使いながら専門機関と繋がって、専門的な情報を足すことができるようになることが重要になってくると感じた。

【委員】

第2期ということで、私は外部目線から、今までの枠組みを少し拡張するような話をさせていただきたいと思う。

今回いろいろな資料を拝見して改めて、すさまじい課題解決型の能力を有している。課題解決はもちろん非常に重要だが、課題解決というと、非常に真面目な意味があると思う。例えば、行政上

の課題とかビジネス上の課題解決とか、誰でも重要だと思う課題が出てくる。

コロナ禍ということもあり、時代的にもそうだと思うが、私個人は実はもう少し、人間が個人化する、ファミリー化するのではないかと考えている。

例えば、ご家族で会食しましょうという言い方をしている。100人以上の宴会はご遠慮くださいと言いながら、ぜひご家族でおいでくださいなどと言って。そういった意味で、個人とか家族というものの範囲の重要性が変わっていくと思う。

そのようななかで、図書館がどういうふうに変化し、拡張、拡大、進化していくのかという観点から言うと、やはり少しパーソナルのところに焦点を当ててもいいのではないかという気はしている。行政の立場では、そこは役割分担上あまり行政の担当ではないということにはなるのかもしれないが、例えば、生活という意味で、例えば、消費とかリラックスとか、いわゆる労働力再生産などと学校で言う。そんなところにも、2期には少し光を当てていきたいというのが個人的な希望。

例えば、趣味でも僕はいいと思っている。今は非常に重要な、労災とか医療とか、そのような情報が主になっているが、加えて、例えば、キャンプのやり方とか趣味等に関することでもいいのかなと思う。特に、高知県は森林も充実しているし、あるいはその生活が豊かだからという理由で、先ほど出たような移住先としての選択になるということもあり得ると思う。

そのような観点から言うと、2期の場合は、1期の課題解決型の成果を踏まえて、消費とかリラックスとか、生涯教育が表に出るようなところ。本読んで良かったね、楽しかったというような原点回帰というか、もう少しパーソナルな部分を充実してほしいということが1点目。

個人という見方からすると、例えば再就職のための資格などは焦点が当たっているが、介護という入口もあるし、昨今の話題ではLGBTの問題等がある。行政がすぐに「あっ、私の担当です。お願いします」と手が拳がらないようなところにも、個人に寄り添うという観点から図書館の支援の輪を広げていけないかと思っている。

だから、課題解決の支援ということよりも、さらにプラスにして、活動の支援、アクティビティの支援みたいなことができればいいと思っている。

それから、市町村図書館支援では、もちろん行政のかつちりした枠組みはある。オーテピアの開館当初から、これは上手くいこうと思っていたことは、高知市民図書館さんは、昭和32年ぐらいから分館とか分室とかに非常に重きをおいて活動をされてこられている。オーテピアでは、高知市民図書館本館と分館、分室の連携は非常に充実している。それが、県市合築に繋がったのかなと、私個人は思っている。長い間市民図書館が心血を注いで頑張ってきたので、それが非常にうまく行って、来館者も多ければ貸出しも多いということに繋がった。

だから、市町村図書館も、なにもかもある市町村の図書館が全部やりますということだけではなくて。例えば、市民図書館の分館として振る舞うぐらいのことで、あとは、オーテピアの高知県立図書館部分との連携でとりあえずスタートするとかそんな方法もあると思う。市町村図書館支援は、高知県図書館振興計画策定委員会というものがあつたが、やはり非常に幅がある。市町村図書館も、高知市民図書館をトップにして非常に幅があるところで、いろいろなかたちで支援をしていくということを考えないと、頑張ってくださいよと言っても、なかなか足がかりがない市町村もあるのかと思っている。そういった意味で、前から申し上げているが、私は市民図書館の分館、分室の運営が非常に参考になるのではないかと思っている。

他委員とも非常に通ずるところがあるが、やはり地方の時代だろうと思っている。私が高知県に来た1997年は大学ができたときだが、はっきり言ってこの世の果てかと思った。だが、ネット通販でスイッチ1個に至るまで欲しかった部品が翌日来るみたいな世界がほぼできつつある。

仕事関係では高知にいるから困った、東京にいればよかった、秋葉原にいればよかったということは、徐々になくなってきている。今後の課題は文化。他委員ともかぶるが、文化的なものが高知にあるだろうかというところが、やはり次の課題かと思っている。

文化的なものがあるというのは、本がここにあるから本を読めば一緒ですよということでは、なかなか利用者すべての理解を得られないのではないかと思う。つまり、高知から発信する文化とは何かということ。日曜市とよさこいでももう十分強い文化、競争力のある文化だと私個人は思っている。競争力のある高知の文化をうまく全国に発信していこうとするときに、図書館がどれだけお手伝いできるかということ。

つまり、本当に文化をこれからいろいろ発信していこうというときに、行政のご担当も含めて、図書館がどこまで支援できるのかということが効いてくるのかと思う。事業や課題解決を支援できる図書館があると、高知県に来ることもなんら問題がなく、田舎に来た感がないというより、かえって過ごしやすいということ。

今、コロナの影響で、アメリカでもリゾート地についていろいろやっている。そのようなトレンドにも乗りながら、広く日本から高知県に移住してくださいというアピールができる。その核となるような一つの文化施設として図書館を作っていくということ。

コロナ禍では、アメリカ等では図書館サービスがそのままというところもあるので、これは今日の資料にあるので期待をしている。

学校との連携では、学校のデジタル化がポイント。各生徒に端末を配るような学校と連携できたらいいと思っている。11月の段階では、学校は授業をちゃんとやっているということだが、コロナがまた拡大して再度休校にする時期が来た際、学校図書館でコロナ対応ができるとは私も思っていない。

例えば、書籍は全部オーテピア経由で借りられる、電子書籍を借りられるというような連携を準備しておけば、教育の充実、安定した教育、学校が休校になっても教育の質が担保できるという意味で非常に重要だと思っている。

【事務局】

地方の時代になって、文化的なものを高知からできるだけ発信していくことについて、図書館としてどういうふうに見えるか。県、市ともに非常に貴重な資料があって、計画的にデジタル化を進め、サイトなどでオープンにしている。例えば、坂本龍馬関係であるとかそういうものは国内だけでなく、海外にも龍馬会があるなど多くのファンの方がたくさんいらっしゃるので、オーテピアがデジタル化した資料を海外に発信していく。それによって高知の知名度を向上させる取組に寄与することもできればと考えている。

学校との連携では、タブレットを1人1台配布ということで県内の学校に導入していると思う。学校訪問した際には、電子書籍のことも含めて案内させていただいている。説明のなかで申し上げた高知県の大きな教育課題である不登校対策について、学校には行きたくない、図書館にも出ていくのは嫌だ、でも、書籍があれば本を読むこともできるということ、そういう子どもたちに広く教えてあげる。子どもの居場所づくりにもオーテピアとして貢献していくことを考えている。

【事務局】

生活のレベルを上げていくための支援というのは、ある意味で言うと、ビジネス性にも繋がってくるのかなと思う。私、仕事の関係上、商工関係が長かったもので、企業誘致などもやっていた。

やはり企業誘致をしても、単身赴任になるのは奥さんが文化が低いところへは行きたくないなどという話がある。そういった意味では、高知にいと文化の高いものはあると言えるような、生活レベルが上がるようなことにオーテピアが貢献できるのであれば、それは一つのビジネス支援に繋がるのではないか。

また、本来であれば県の立場なのかもしれないが、市町村支援のあり方に関連し、昨日、梶原の雲の上の図書館に行ってきた。そこで職員と話をするなかで、梶原だと例えば脱藩の道があるということが話題となった。そういった意味で言うと、高知市民図書館としては、龍馬の繋がりでコラボ事業を行うことができる。市町村支援という意味で言うと、ほかの町村の図書館との連携を深めることが地域の図書館のカブけにもなってくるのではないかと思った。

【委員】

ご意見を伺って、皆様のお考えはだいたい同じ方向を向いているだろうと感じた。つまり、生活様式、それから文化、それから政治のあり方、教育のあり方、すべてがコロナだけがきっかけというわけではないが、変化しつつあると思う。そのなかで、図書館、図書館活動、オーテピアの活動をどうやっていくかということ。いろいろなご指摘があったが、例えば行政との関わりはどのようにするか、課題解決がいかに重要であるかを認識させる。委員は表裏一体とおっしゃったが、そのようなかたち。

委員がご指摘の、一体、我々は行政側からどう見られているのかがポイント。非常に軽い存在なのか、県庁が閉まっても図書館が開いていたっていいと考えて頑張るべきか。その辺りをもう一度確認する必要があるだろうということだと思ふ。

情報に関しては図書館が一番アドバンテージ持っている。そこを最初に閉めるというのは、これはとても真っ当な考え方じゃないと言えるだろうと思う。これからまた行政の縦割り論の批判がはじまるかもしれない。そのときに、実は横の繋がりを維持できる、それを推進できるとすれば、図書館が絡むしかないだろうと私は考えている。

広い意味で言うと、あらゆる面で我々はどんな社会の変化が来ようが、文化の変化が来ようが、それに対して柔軟に対応できる。もっと言えば、情報というものの発信と収集を持って、それに先頭に立って対応できる。そういうことを示す方向性が、各委員の考えの根本にあるだろうと思う。

人的な確保、費用の確保、それから職員の方々のスキルアップ等々大変ではあるが、極めてやりがいがある仕事。そもそも、我々は政治システムではなくてもちゃんとした協力ができるということを示すためにも、この組織を立ち上げた。そういう面でも、他の組織の模範になり、また注目を浴びている、それだけに評価も厳しい。そういうなかで実力を示すときがきたのではないかと思う。だから、柔軟かつダイナミックな活動がどんな変化の中においてもできるということを示していただきたいと思う。

地道なことだと思うが、かなり詳細にわたるアンケートの最終的な集計結果が出つつあると思う。こういった活動も、一番地に足ついたところからのアンケート調査ができるという一つの手本でもあるだろうと思う。

いろいろな委員会でアンケートと言っても、その方向性とか規模等に関して驚くようなものが出てきた試しがない。そういう面でもかなり詳細で広範にわたるアンケートだと思うので、十分に活用いただきたいと思う。

【委員】

資料を見させていただいて思ったのは、ずいぶん頑張っているなと思った。これは本当に真面目な話で、別にヨイショするつもりもない。全般的に問題点は問題点としてきちんと把握して、どういふふうに改善していこうかというようなところをきちんと真面目に考えていて、次のステップというのを的確に捉えようとしているという、その視点で見たときに非常に頑張ってらっしゃるなと思った。

市町村職員について。職員の階層別研修で、図書館の利用を説明する場面が30分ほどあって云々というところは、県の職員だけが対象なのか、市町村の職員も含めているのか。

【事務局】

県職員の研修は県のほうでやって、あと高知市はほかの市町村を含めた、広域の研修でやっているはず。研修自体は別々。

【委員】

それぞれ図書館についてもやっているのか。

【事務局】

図書館について少し話す機会を設けてもらうのは、両方でやっているはず。

【委員】

それはこちらのほうから出かけていってということでもいいか。

【事務局】

そうだ。

【委員】

繰返しになるが、仕事に図書館を活用する研修を受ける、少なくとも初任者向け研修は図書館の利用可能性を知るというレベルなのかと思った。

自治体職員の研修では情報提供がきちんとされていると理解していいか。

【事務局】

市町村支援の市町村の職員向けもそうだが、県の職員に対しても人事課が主催をしている新採、中堅層などステージごとの階層別の研修にアウトリーチの担当などが出向いている。また、今年度からは、学校現場に広げたいということがあり、教員の研修をする教育センターにも出向き、共有をして、それを取りまとめるチーフ級の研修を実施するなど、段階的に研修を広げている。

図書館の職員がすべて学校に回って図書館について理解をしていただくということは、マンパワ一的に難しいので、教育センターなどの研修機関にきっちりとオーテピアのことを理解していただくことをしている。

【委員】

図書館活用をPRする際に、新しいことを考えたり、正確な仕事をするうえで図書館を利用する

のが当然、必要だという視点はあると思う。むしろ、それがメインだが図書館を利用したほうがずっとラクだということもぜひ伝えてもらいたい。

仕事をするのに、10の力で10の結果しか出ない。下手すると10の力で3ぐらいの結果しか出ない場合もある。できるだけ少ない労力で大きな成果を上げようと思ったときに、図書館は非常に有効な手段だから、ラクしていい仕事をしようと思ったら、ぜひ図書館を使ったらいいということがPRする相手に届けてほしいメッセージ。

カチッと仕事をやるためにはということばかりに力を入れていると、なかなか相手の頭の中に入ってくれないので、モチベーションをきちんと上げることに図書館を利用するというのが大切だと、私も長いこと図書館のことを研修の中でしゃべってきた経験から思う。

そこで必要なのは、では図書館を使ったら自分にどんなメリットがあるのかを伝えること。仕事が正確になるというのは、それは誰でも分かるが、自分が仕事をやっていくうえで、よりいい情報が素早く手に入って、それを利用すると、うだうだとやりとりしなくてもいい提案がすぐできることで、自分がラクしていい結果が得られるというイメージを、きちんと持ってほしい。

図書館活用の研修等を受けて、実際に使ってみたら役立った。少ない労力で良い成果を出せた経験をした職員が、できればかなり短い時間で今後どんどん増えていって欲しい。これは図書館だけの話ではなく、行政全体がいかにか効率的に動けるか。それからいかに、モチベーションを維持しラクしていい仕事ができるかというような、働き方改革という意味でも非常に意味のあることだと思っている。それを図書館というのはちゃんと提供できるよというイメージをぜひ持ってほしい。その人たちがほんとに増えていき、図書館の重要性はもう語らなくてもいい時代がいつかきてほしいと思う。

二つ目。同じくラクする視点ということで言えば、いろいろなところとの連携について。今度は図書館の職員の方と連携する相手にとってもラクする視点というのをぜひ持ってほしい。

新しい事業をやろうと思うと大変だということもあるかもしれない。一方で、いろいろな団体にしても、我々にしても、新しい展開をやらずに、去年と同じことをやっていたのでは、明らかに時代から取り残される。もっと言えば、だんだん不要な機関となっていて潰されるのが目に見えている。だから、新しいことをやるのはある意味、必須なこと。

それをいかに効率的にやるか、ラクして連携することによって、相手が持っている能力を上手に使わせてもらって、こちらの不得意なところをカバーしていく。その結果として注目もされるというようなかたちに持っていくイメージをいろいろな団体・機関と共有してほしい。この共有ができると、その後連携を進めていくのがすごくラクになる。

連携というのは、話し合うだけよりは相手のなかに飛び込んでいって一緒に事業をやって、「あっ、こういうことだったのね」といってお互いに思うことが大事だと思う。その一歩目を踏み出すときのモチベーションが、もっとラクしていいことやろうというふうになっていただきたいと思う。

そのためには、我々のほうも一定のスキルは持っていなければいけない。それから、トータルで言うと、図書館が最新の情報を常に的確に持っている。さっきの資料費とも関係するが、一定の資料費をきちっと確保していて、最新の情報をきちんと提供できるシステムを持っている、最新の的確な情報を提供できる人を抱えている。そういう情報であればあるほど、相手のほうからすれば、例えば自分のところで必要な情報（資料）だが1回、2回しか使わないというような情報については、図書館に「これ入れてもらえませんか」と頼めばいい。最新の情報は特定の連携先だけで使うわけではなく、図書館にとっては2度3度使えるものであったりする。そういう点で、必要な資料

費と有能な司書を抱えているという図書館のアドバンテージを高め、いかに連携先に利用してもらい、ラクしてもらおうかという視点を持っていただきたい。そういう意味での説得の仕方、接し方を考えていっていただきたい。

それからティーンズ部。これは前回のときもすごく褒めた。面白い、ぜひこれは本当に進めてもらいたい。このようなことが話題になって、それこそSNSとかで発信されて全国から話を聞かしてくれてと言われるようになれば、とても面白いと思う。そういう点で言えば、できるだけ彼らのアイデアを拾い上げることも必要だろう。それから、一定程度の自由度を与えながら、例えばPRをしてもらうとか、SNSで動画を上げてもらうとか。彼らの得意ないろいろなかたちで図書館のことを外へ向けて発信してもらい、彼らも楽しんでもらう。

あわせて、今はいろいろなかたちでボランティアや、そういった活動をやったということがその人たちの評価にもつながる。成果をきちっと出してくれたことに対しては、図書館側もなんらかのかたちで、彼らはそれだけのことをやったということがわかるようなものを残す、あるいは提供するというようなことをしていただきたい。お互いにWIN-WINの関係ができれば、ボランティアやティーンズ部を卒業後に、例えば大学に行った先輩たちから、あれやったら面白いし自分にもプラスになるからぜひやったほうがいいよというような伝統ができる就非常にうれしいなと思う。

【事務局】

お話をお伺いして、そのとおりだと本当に重く受けとめている。まず、ラクしてやろうということ。私どもが県立学校、市町村、それと先日は職業訓練校なども直接出向いて訪問した。ラクしてっていうことは、図書館の持っている支援、人とか資料とか、それを有効に活用することで、向こうの抱えている、例えば生徒を集めるのに苦労しているような状況を図書館で解決してあげるよと。お互いに不足する部分を補い合ってお互いWIN-WINの関係になる。それによって、いろいろなPRにしても、ラクしてできるような方法があるということを説明している。そういうことをいろいろなところで、まだまだ不十分な分野が多いので広めていきたいと考えている。

オーテピアのティーンズ部に関しては、これも県内に新設された国際関係の学校で、学校長と直接話をした。その学校では今、ティーンズ部は部員にイラストなどを投稿してもらうという取組にとどまっている。学校としては、単位ではなくプログラムが認定要件のようなものがあるそうで、学校の生徒と何かコラボ企画を作るなど、それぞれの学校の特性に応じたかたちでティーンズ部との連携を深められるよう考えていきたいと思っている。

【事務局】

市町村の研修の部分でも述べたが、自治会館では体系的に全県下の各市町村職員が集まって階層別の研修を受けおり、そのときに図書館のPRをさせてもらっている実例がある。

ラクする視点という部分で、確かに行政部門の職員と、図書館の職員がラクになるという視点というのは非常に勉強になった。

ティーンズ部については、私もNPOを長くやってきている関係で、学生等がボランティア協力をたくさんやっていた。そのなかで、やはり心がけていたものは、機関誌への記事の投稿、アニメーションや作画の投稿については必ず、例えば龍馬学園のデザイン部の学生であることを記名で載せるというようなことをしている。それが実際に学校での評価に繋がるということがあったので、ティーンズ部の活動は、SNS等、実名の掲載については配慮しながら、評価に繋がるよう

にやっていきたいと思っている。

【委員】

活動自体はよく頑張っているという皆さんの意見は間違いないと思う。ただ、内輪の評価で終わってはいけない。別に事実以上の評価をもらう必要はないが、正当な評価を得るためには、やはりきちんとした広報活動、それから行政機関とのやり取りが必要。それから、せっかくやったことは、広報活動の補足により効果が期待できるようにする。サービスの内容では各活動を進めていくというのが一番だろう。

新しい仕事はいくらでもあるので、それを図書館と一緒にしてもっとラクをしましょうという新しい視点、見方は重要。ある面、当たり前だが、言葉がないのできちんと概念化できないというようなことがあるので、そういう目でいいキャッチコピーを考えて、活動を印象付けるということも必要だろうと思うし、そういう視点を取り入れていく。

そもそも、このオーテピア自体が新しい視点からできた組織なので、旧来の発想に捉われることなく、時代に対応した新しい活動をいつも模索していただきたい。それが一番大事なことだろうと今、思っている。

たくさんご意見をいただいたので、一時になかなか実行、理解は難しいと思うが、事務局でも今後の計画の作成等に関しては、ぜひ参考にさせていただくようお願いする。